

リブが「見えない」時代に

「ルッキング・フォー・フミコ」をみる

北原恵

五月にわたしの教える大学の授業で、映画「ルッキング・フォー・フミコ」(一九九三年・57分)を上映し、監督・栗原奈名子さんに講演をお願いする機会があった。この授業(「映像文化論」)では、ジャーナリストの野中章弘さんを招いたり、同じ大学の学生の制作した作品を発表してもらったりしたのだが、自主制作の作品や、女性の映像制作者を是非紹介したいと考えていた。

「ルッキング・フォー・フミコ」女たちの自分探し」は、ニューヨークで暮らす栗原奈名子が、突然肺がんで亡くなってしまった友人・大和史子のルーツを求めて、日本に旅に出るところから物語りは始まる。自分と同様、日本社会に息苦しさを感じてニューヨークに来たフミコが、かつてウーマン・リブに関わっていたこと

を知った栗原は、当時のリブ運動を担った女たちを訪ね歩く。

「70年代当時マスコミから否定的に扱われ、わずかに5年で社会の表面から消えていったリブ運動、その本当の姿は未だよく知られていない。いったい何を求める運動だったのか。日本社会はどのような影響を受けたのか。関わった女たちは今どんなふうになっているのか。カメラは当時のリブ参加者5人を追って日本へ。様々な人生を生きてきた彼女たちの暮らしぶりとその言葉から、四半世紀の女性史が垣間見える」(ビデオ解説チラシより)。

映画のなかで第一人称で語る(わたし)は、まず、札幌に住むフミコの姉・大和説子を訪ねる。今も北海道の市民運動に関わりながら、病院の清掃で生計を立てている説子は映画の中盤

でインタビューに答えて次のように言う。――
「高度成長期でね、辞めたついでいくらでも働き口があったわけ、二〇代のときは。三〇過ぎたらね、面接に行っても落ちるようになったの。全部落ちるの。……そのパートさえ落ちるようになってきたの、面接で。私の場合はこちらと暮らしを成り立たさないでダメでしょ、家計補助的な資金じゃダメなわけだから。」これは初めてこの映画を見たとき、とても印象に残ったシーンのひとつである。

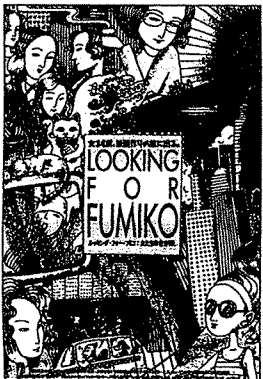
舟本恵美子は、フェミニストであるために仕事をほされながらも、大手広告代理店に勤め続けた。彼女は一九七三年に誕生した雑誌「女・エロス」の発起人である。一九八二年まで続いたこの雑誌は、創刊号の特集「婚姻制度をゆるがす」で始まり、「婚姻制度の呪縛を解け」(十二号)など結婚制度を徹底して批判し、特集「女解放なくして反戦なし」で終刊した。女のコンサートをプロデュースし自らも歌い、「女のカレンダー」を作ってきた若月澄江は、「女たち」という言葉が、リブから生まれたことを教えてくれる。子どもを出産して家族を持つても婚姻制度を拒否して別姓を続ける看護婦の村上智子。鍼灸所で治療をする田中美津の姿に、

「女の運動とは関係ない暮らしぶり」に、最初はがっかりする栗原奈名子。物語は、五人を軸に当時の貴重な映像をさみながら進行していく。

この映画を見て、初めて「リブ」という言葉を聞いた学生たちの反応の大半は、まず、ウーマン・リブの存在を知って驚いた、激しさに衝撃を受けた、というものであった。

「映像を見て、女性運動の激しさに驚いた。彼女たちの、信念を貫き通す、といったような動きに感動を覚えた」(一回生・女)

「私は今日までウーマン・リブ運動のことは、全然知りませんでした。初めて見たウーマン・リブ運動の印象は、『過激すぎる』の一言でした」(二回生・女)



「ルッキング・フォー・フミコ：女たちの自分探し」
1993年、16ミリフィルム・ビデオ/
ドキュメンタリー作品/57分
制作・監督：栗原奈名子/撮影：スコット・シンクラー/共同製作：女のメディア・ネットワーク、スコット・シンクラー
日本での問い合わせ：シグロ

「ウーマン・リブ運動をしていた人たちは、とても生き生きしているな、というのがまず思った印象でした」(一回生・女)
「質問タイムで『やりすぎではないか』という意見が出ましたが、もし映像のような盛り込みや運動がなかったら、今私たち女性の立場はなかったんじゃないかと思えます」(一回生・女)

このように、資料映像を用いた盛り込みの場面に對しては、「過激すぎる・やりすぎ」と感じるか、そこまでして自分の信念を貫くことに感動するかの評価は分かれたが、最も印象的なシーンであったことは間違いない。六〇年代末から七〇年代にかけての運動を経験したり、メディアでの報道にせよ記憶にとどめている者たちにとつて、「ルッキング・フォー・フミコ」に登場する盛り込みの場面は、「過激すぎる」とは言えないシーンかもしれないが、ほとんどの学生が感想文で言及するほどの衝撃を与えたのである。

「座り込んで抗議している場面

には衝撃を受けた。たくましさというよりも、むしろささまじさという印象でした。また昔は女性が『便所』なんて呼ばれる人権を無視したひどい社会があったのだなとあらためて実感し、おどろきました」(一回生・女)
「昔の女性って大変だったんだなあと思いました」(二回生・女)

女が『便所』と呼ばれる時代は、決して過去のものとなっていないが、ウーマン・リブは、今の学生たちが生まれる十年も前の話である。遠い過去であるからだけでなく、映像を見ても、信じられないと感想をもらす学生もいる。

「やはり、現在は恵まれた生活を送っているからか、彼ら、彼女らの気持ちは理解できないし、本当に日本にそんな時期があった事自体が信じられません」(一回生・男)

また、なかには中ピ連の資料映像を見て、「オシヤレ」だと感じた学生もいた。

「中ピ連の人達がみんなピンクのヘルメットをかぶって活動していたのはビジュアル面で

インパクトがあつて、やっていることとは関係ありませんがオシャレなかんじがしました」
(二回生・女)

百人あまりの学生たちの感想文を読んで、わたくしが驚いたのは、それらのなかにリブに対する揶揄やからかいの言葉が全く見られなかったことである。彼女／彼らは、リブへの揶揄の語法以前に、リブそのものを全く知らないのである。それは、現在の社会がフェミニズムに対してからかいの視線を持たない、ということではない。それどころか弱者に対するからかいと揶揄による無化と抹殺化は、すさまじい勢いで拡大しているように見える。リブが感動的か、過激すぎるか——いずれにせよ、映画を見た二十歳前後の学生たちは、リブの活動をストレートに受け止めたのである。

* * *

わたしが「ルッキング・フォー・フミコ」を学生に見せようと思つたのは、監督の栗原さんが現在京都に在住していることを知り、直接、制作者の話を聞かせたいと考えたことがきっかけであつたが、歴史としてリブの運動だけでな

「ルッキング・フォー・フミコ」『季刊女子教育もんだい』一九九九年十月。

「ルッキング・フォー・フミコ」の宣伝チラシのなかで、上野千鶴子は、「リブがこの国にたしかにあつたことを、そしてそれがいまもしつかり根づいていることを、伝えられないわたしたち年長のわたしの非力」を反省し、「あとから来た世代」のナナコは、リブのドキュメントを映像で表現するという、わたしたちの世代が思いつかなくった手法をとつた」と述べて、この映画を推薦している。日本のウーマン・リブについては、周知のように、溝口明代・佐伯洋子・三木草子の編集による大部な資料集『資料日本ウーマン・リブ史』(松香堂書店、全三巻)が出版されている。この労作が出版された一九九二年から九五年は、「ルッキング・フォー・フミコ」(一九九三年)の制作・上映された時期にちょうどあつており、また秋山洋子の「リブ私史ノート」(一九九三年)も発表されている。栗原の映画には、活字のみでは伝えきれない七〇年代当時の、あるいは九〇年代初頭を生きたわたしたちの貴重な映像が映っている。ミニスカートや当時のファッション、自分では乱暴な言葉遣いをしてしていると語りながらも、今

く、この映画自体も相対化できる時期に入ったと思つたからでもあつた。映画に対する好き嫌いで上映するかを判断するのではなく、すでに完成から十一年が経過した今、わたしたちは映画を歴史的文脈に位置づけることができる。十年ぶりに学生といっしょに映画を見て、「ルッキング・フォー・フミコ」が、「リブのドキュメンタリー」というよりも、フミコを通してリブについて知ろうとする栗原奈名子の物語だという当たり前のことを、私は映像から再確認した。映像では、栗原を見る撮影者スコット・シンクラーの視線がときどき感じられる。たとえば、冒頭のニューヨークを歩く栗原の身体や顔のアップは、第一人称で語られるナレーションとは裏腹に、他者としての、(彼女)としての第三人称として映像化されている。また、映画の最後は、再びニューヨークの公園で、栗原が白人の友人たちに囲まれ芝生で談笑する遠景のシーンで終わるのだが、今回もこの場面の意味が気になった。だがこの場面や、映画の完成直後日本国内で上映運動が展開された当時に抱いたこの映画に対する種の違和感自体も、そのように、この映画を歴史的にとらえようとすると、自分で解釈可能なものとなる。

から見ると当時の活動家のずいぶん「女らしく」感じられる言葉遣い。話す内容だけでなく、しぐさや表情から、映画を見る者は、リブについての多くの情報を得るのである。その意味でも「ルッキング・フォー・フミコ」は若いリブを知らない世代が関心を持つきっかけになることは間違いないし、もつと様々なウーマン・リブの映像が撮り直されたいと思つた。

そして、二〇〇四年に入つて、再びリブの再評価の動きが活発化している。伝え聞く主なものだけでも、三月に東京で開かれた「リブという(革命)」(文学史を読みかえる⑦)、加納実紀代編、インパクト出版会、二〇〇三年)の出版記念シンポジウムには、田中美津・秋山洋子・千田有紀を迎え、リブを知らない多くの若い世代で会場が満員になったという。シンポジウムは、田中美津の名前が予告されたことから、彼女が本場に登場するのかと開催前からわたしの周囲でもかなり話題を呼んでいた。だが、田中美津の名前に反応した人々はごく一部なのかもしれない。出版記念シンポジウムの宣伝が某大手新聞に載つたが、担当記者も知らなかったからなのか、田中美津の名前は抜けていたという。そして、彼女の名前を知らないのは、若い世代

(編集部よりおわび)

アート・アクティヴィズム43「解放への共同作業」マッド・ウイメン・プロジェクト——バク・ヨンスクさんの写真表現(本誌一四〇号掲載)の中で、図版に付した作品解説に間違いがありました。

p.107 図版15 についての解説

「15」この女性は、わたしの妹が彼女が病気がつた時の姿と仕草を象徴しています。モデルはフェミニスト画家ジョン・チョンヨフです。(バク・ヨンスク)は、正しくは

p.104 図版8 についての解説でした。

お詫びして、ここに訂正いたします。

秋山洋子は、かつてこの映画を見て女性監督の主体と作品について興味深い指摘をしたことがある。彼女は、「映画のなかの」ナナコとは誰だろうか。それは監督の栗原奈名子と同じなのだろうか。……画面に登場したナナコはあまりに無邪気でわかりやすく、私はそこにあるよそよそしさを感じてしまった」と問いかけ、つぎに何を探して旅に出るのか、楽しみである」と期待を語って批評を締めくくっている(秋山洋子「監督と作品のあいだ——「林檎の木」と

に限つたものでもないらしい。日本の中堅の人文・社会科学系の研究者のなかで、田中美津について知っている人たちはどれだけのいるだろうか。ベティ・フリーダーンについては知っていても、田中の名前を知らない／忘れてしまった「知識人」たちは、大勢存在しているのではないか。

リブについてはマスメディアを通して知りえるのみであつた「あとから来た世代」の栗原奈名子だけでなく、リブを全く知らない世代の研究者を新たに加えて、読み直しは現在進みつつあるように見える。この出版記念シンポジウムのと、六月には鳥取県で日本女性学会が、「ウーマン・リブ運動が拓いた地平を、その後展させ得たのかを検証する試み」として「シンポジウム・ウーマンリブが拓いた地平」を開催した。これらシンポジウムがやがて活字化されることよつて、議論の内容については詳細を知ることができるようになるだろうが、なぜ、今再評価されるのか、「再評価」によつて可視化できること・できないこと・周辺化されること、にも眼を向けられるべきであろう。